国語

３年生｜「めだか」（教育出版）

子どもたちが意欲的に学習する導入場面の工夫

半田真人｜高知県いの町立枝川小学校

1.「めだか」導入場面での最大のポイント

教育出版３年上「めだか」の文章構成は次のように５つの部分からなっていると捉えることができる。

①	②	③	④	⑤
話題提示	問いの文「では、めだかは、そのようなてきから、どのようにして身を守っているのでしょうか。」	敵からの四つの身の守り方	厳しい自然から身を守るための身体の仕組み	終わりに

めだかの導入の授業をする上で一番のポイントになるのが、②問いの文「では、めだかは、そのようなてきから、どのようにして身を守っているのでしょうか。」をいかにして自分事として実感を持って捉えさせるか、である。それが成功すれば、その後の③④⑤は、自ずと興味を持って意欲的に読み進めていくことができる。次にその方法を述べる。

2．授業の実際

「めだか」の場合、導入では教材文を少しずつ提示する「小出し法」を用いると、子どもたちがめだかに持っているイメージと実際のメダカがおかれている厳しい現実とのギャップに気づきやすい。そこでまず教科書に出てくる「めだかの学校」の歌詞までを提示し、CDで「めだかの学校」の歌を流した。そこからのんびりした楽しいイメージを引き出した。

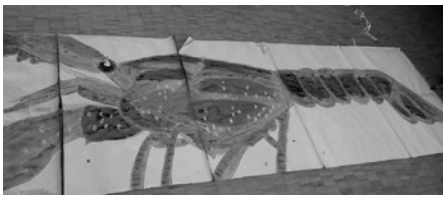
次に①「話題提示」の残り全部を提示した。ここではたがめ、やご等がいかにめだかにとって恐ろしい存在かを実感させることが重要である。そのため、それらの敵がめだかを襲っている写真を提示した。

▲やごがめだかを襲う　写真：アフロ

子どもたちは、水生昆虫の恐ろしさに愕然とした。

続いて、めだかは日本で最も小さい魚であることを述べた文に着目させた。小学３年生の平均身長約130cmをめだかの大きさだと仮定し、その割合で計算した大きさの、めだかの敵の絵を作成しておいた。そして、あらかじめ教室の壁際に巻き上げておいたそれらの絵を、一斉にほどき落とした。

▲たがめ：約4m　やご：約3m　みずかまきり：約4m　げんごろう：約3m



▲ざりがに：約5m　大きな魚：10m以上

大きなどよめきの声が上がり教室は騒然となった。子どもたちは確実にめだかの厳しい現実を実感した。ここで問いの文を提示することにより、問いの文を子どもたちが自分事として捉えることができた。

この導入の工夫によって、子どもたちはその後の学習を意欲的に進めていくことができたのである。

3．おわりに

児童が単元を通し本気で学習に取り組んだ要因は、

① 教材文に出てくる事柄は、細大漏らさず他の文献、映像等で、徹底的に研究したこと。

② 児童の視点でも教材文を理解しようとしたこと。

③ 常識に囚われず柔軟な発想で教具を開発したこと。

である。「授業は教材研究の質と深さで決まる」という先人の教えの大切さを再認識した次第である。

出典：令和６年度 教育出版 ひろがる言葉 小学国語 三上p.50「めだか（杉浦 宏）」